少年野球選手の第１中手骨に発生した骨端症の１例

藤田保健衛生大学　整形外科
西尾　真　鈴木克侍　志津香苗　岡林俊貴　辻村俊造
大石央代　木村稚佳子　山田治基
愛光整形外科
早川克彦　中根高志

【症例】

10 歳 , 男子 . 主訴は左母指痛 . 現病歴は 8 歳より硬式野球部でキャッチャーを続けてきた . 平成 23 年 6 月頃から明らかな外傷なく徐々に左母指痛が出現した . 7 月初旬に近医を受診し当院へ紹介となった . 既往歴に特記すべきことは無かった .

【所見】

左第 1 中手骨基部の疼痛 , 圧痛を認め , ピンチ動作により疼痛は増強した . 関節可動域制限は明らかではなかった . 初診時単純 X 線像では第 1 中手骨基部の骨端核に硬化像と扁平化を認めた . 発症 1 ヶ月の CT 像では中手骨々端部は圧潰し掌側を中心に硬化像を示していた . MRIではT1,T2 強調像ともに骨端部にびまん性の低輝度を示し , 一部 T1 では等輝度 , T2 では高輝度領域を伴っていた .

【経過】

手指を使う運動 , 野球は中止し保存的治療にて経過観察を行った . X-P, CT で骨端部の硬化像は 6 ヶ月以降には軽快した . また圧潰は修復されなかったが関節裂隙は保たれていた . MRI で認めた中手骨々端部の輝度変化は発症後 7 ヶ月以降ではほぼ正常の輝度を示していた .

【考察】

我々が渉猟した限りでは第一中手骨々端症の報告は無かった . 治験例の全経過で骨折線や骨膜反応などは無く,骨端部の硬化像と扁平化を認めた . MRI の T1, T2 強調像で骨端核は低輝度を呈していたため長管骨の骨端核に発生した骨端症と診断した .

【結語】

少年野球選手の第1中手骨々端部に発症した骨端症の 1 例を経験した . 運動の制限のみで特別な処置を必要とせず予後良好な経過が得られた .